

ラテンアメリカ

# 随想

## 遠くて遠い ラテンアメリカとインドの可能性

岩城 聡（日本経済新聞社 ニューデリー支局長）

「森でインド人とコブラに会ったら、まずインド人を先に殺せ」——バンコクに駐在中、何度となく聞いたジョークだ。インド人は予測不能な怖さがあり、とりあえず先にインド人を叩いておけというわけだ。東南アジアの人々には、ビジネスに長けたインド人に対する畏怖の念もあるようだ。

インド系の移民、いわゆる「印僑」は東南アジア諸国連合（ASEAN）から中東、そしてアフリカに散らばる。しかし、アフリカの向こうに広がるラテンアメリカ（中南米）諸国は、インド人にとって物理的な距離も、そして心理的にもずいぶん遠い存在だ。

私自身は2004～07年にサンパウロに駐在。その後、「BRICs つながり（当時「S」は小文字）」という強引な理由で、2011～15

年にインドの首都ニューデリーに赴任した。そして23年4月から再びニューデリーに赴任しているが、日々、インドの街中で中南米を感じる瞬間はほぼ皆無だ。

1つだけあると言えはあ。これはいろんなところで話しているが「牛」だ。インドの牛には大きなコブがある。そう、ブラジルのシュラスコでいただく「クッピン」にあたる部位だ。それもそのはず、ブラジルの畜牛の大半はインド起源だと、この随想を書くために調べていて初めて知った。バナナとマンゴーもインドから中南米に渡ったそうだ。

ブラジルで牛肉は日常食だが、インドでは牛は「神の乗り物」とされ食するのはご法度だ。だから、あのマクドナルドも1996年の進出以来、インドでは牛肉を「封印」

している。肉は鶏肉を使用。ベジタリアン向けにジャガイモなどをパテにしたメニューがある。

日本勢では牛丼店「すき家」を運営するゼンショーホールディングスも店舗を展開しているが、鶏肉や野菜などを使った丼もののメニューを中心に据えている。牛丼やハンバーガーを提供しようものなら、店が焼き打ちにあっても文句は言えない。ちなみに吉野家は事実上「撤退」した。当たり前か……。

かように民族的にも食文化的にも遠い中南米とインド。だが、近年は経済関係が深化している。

地元報道などによると、インド企業は現在までに150億ドル以上を「ラテンアメリカ・カリブ地域」に投資しているという。インドと同地域の貿易額は2018年の290億ドルから22年には400億ドルに成長した。といっても、中国の4820億ドルと比べれば圧倒的に小さいわけだが。

中南米とインドの間で、貿易や投資が活発な分野はエネルギー、農業、自動車、医薬品、IT（情報技術）などの分野だ。防衛、発電、再生可能エネルギー、スタートアップなどへの投資も増えてはいるが件数や金額はそれほど多くない。

インドの二輪車大手TVSモーターは2023年10月にベネズエラ市場に参入した。二輪車と三輪車を計14モデル投入する。インドの二輪車メーカーがベネズエラに



ブラジリアの大統領府での会見後、記念撮影におさまるルーラ大統領と当時の妻マリーザ・レチシアさん（故人）。真ん中は筆者（2005年5月、筆者提供）

参入するのは初めてで、同社のグローバル事業の拡大戦略にとって重要な到達点だという。

インドのIT企業もここ数年、中南米への投資を拡大・増加させている業界の代表格だ。10年前、中南米地域におけるインドのIT企業の雇用者数は1万5000人程度だったが、今は5万人近くを雇用しているという。

また、インドとペルーは先ごろ、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大で中断していた自由貿易協定(FTA)の締結交渉を再開することで合意した。インドにとって、ペルーは中南米・カリブ海地域で3位の輸出先。インドは自動車や鉄鋼製品を輸出し、鉱石や肥料を輸入している。

一方で、中南米からの対インド投資も増加している。特にブラジルとメキシコからの投資が目立つ。これらは製造業だけでなく、世界最大規模のパンメーカーであるメキシコのBimbo社など食品加工のような分野にも及んでいる。

なぜ今、インドの中南米への関心が高まっているのか。「インド政府は国連安保理の常任理事国入りなどを見据え、中南米の重要性

によりやく気付いた」。インドのシンクタンク「ORF」の客員研究員ハビ・シェシャサイー氏はこう教えてくれた。

インド大統領官邸や外務省など政府の主要機関が集中する「サウスブロック」。ここで、中南米の話題がよく語られるようになったのは、遡ること1968年に、インディラ・ガンジー首相(当時)がブラジルなどを訪問した時以来だとか。

インドの歴史上、中南米が地政学の表舞台に登場することはめったになかった。中南米には核兵器を保有する国はなく、これまでインドの対外政策の優先事項の隅に追いやられてきたわけだ。インド政府は中南米を軽視してきた自覚がある。

そうしたなかで、2019年に外相に就任したジャイシャンカル氏が中南米接近に大きく舵を切った。インドが大国になるためには中南米での足跡が必要だと主張、それを実行に移した格好だ。22年8月にブラジル、アルゼンチン、パラグアイの3か国を訪問。23年4月にはガイアナ、パナマ、コロンビア、ドミニカ共和国を訪問

した。

信じられないことだが、彼の前に中南米を訪問したインドの外相は、2003年にブラジルを訪問したヤシュwant・シンハ氏だという。約20年前のことだ。職業外交官だったジャイシャンカル氏はモディ首相に熱望され就任した。インドが西半球の33か国を無視しては、世界的大国としての役割を果たすことはできないとよくわかっている。

中南米のなかでも、特にブラジルとの関係強化にインドは心を砕いている。ブラジルとインドは23年に外交関係樹立75周年を迎えた。ブラジルは24年に20か国・地域(G20)の関連会合の議長を務める。これは両国関係がさらなる高みに到達する絶好の機会だ。

インドは04年当時、ブラジルの29番目の主要輸出先だったが、現在は10番目に浮上しているという。今やインドはブラジルの第5番目の貿易相手国になった。インドからブラジルへの主な輸出品目は石油加工製品、農薬(殺虫剤、殺菌剤)、化学製品、医薬品など。ブラジルの対インド輸出品は原油、鉄鋼石、大豆油、金などが含



インドと中南米の経済イベントで。左から8人目がジャイシャンカル外相(2023年8月、外相の「X」より)

まれる。

ブラジルの航空機メーカー・エンブラエルのフランシスコ・ネット社長兼最高経営責任者（CEO）は23年8月に訪印した。その際、「インドでは低い労働コストで、エンジニアリングや設計など専門的な技術を持つ人材を活用できる」とインド人材を絶賛したようだ。

目下、エンブラエルはインド空軍への新型輸送機 C-390 の納入を狙っている。空軍は老朽化した輸送機 AN-32 の後継機として、40～80 機の中型輸送機の入札を進めている。

地元報道によればエンブラエルは C-390 の機体の販売だけでなく、インドが一番欲しがっている高度な技術の移転を検討しているほか、組立ラインをインドに設置し、整備・修理の施設も設ける可能性もちらつかせつつの売り込みを強めているようだ。

また、インド二輪車大手のバジャジ・オートは、海外初の生産拠点をブラジル北部マナウスに設置するとインドではささやかれている。中南米の二輪車市場の規模は22年の1060万台から28年には2370万台に一気に拡大するとの報道もある。ブラジルは地域最大の市場であることから、よりマーケットの近くに生産拠点を持つべきとの思いがあるようだ。

ご存じの通り、現在、ブラジルで生産される車の約9割は「フレックス車」。ガソリンはもちろんのこと、サトウキビなどから生成されたバイオエタノールにも、両燃料の混合にも対応する車のことだ。サンパウロの道路には、かすかに甘い匂いが漂っていたのを思い出す。

トヨタ自動車のインド法人トヨ

タ・キルロスカ・モーターは22年10月に、ブラジルから輸入したフレックス燃料ハイブリッド車「カロラ・アルティス FFV-SHEV」をインドで初めてお披露出し、実証実験に乗り出した。インドでは電気自動車（EV）の普及が徐々に進んでいるが、政府は輸入に頼るガソリンへの依存度を減らすため、国産のエタノールを使うフレックス燃料車の製造を自動車メーカーに促したいのが本音だ。

そんなインドとブラジルが主導する形で23年9月、バイオ燃料の生産と使用の拡大を目指す「世界バイオ燃料同盟（GBA）」の設置を宣言し、各国に参加を呼びかけた。今後、技術開発の推進や、基準の設定などを通じてバイオ燃料の利用拡大を国際的に加速させるのが狙いだ。

2023年はインドがG20首脳会議（サミット）や関連会合を取り仕切り、グローバルサウスと呼ばれる新興・途上国の「盟主」として大いに存在感を高めた。その議長国の座は23年12月1日からブラジルにバトンタッチされた。



2023年9月のG20サミットの際、首脳会談を行ったブラジルのルーラ大統領（左）とインドのモディ首相（インド首相府のHPより）

G20の運営は、前年と翌年の議長国を含む3か国が連携してあたることから「トロイカ」と呼ばれる。24年のトロイカはインド、ブラジル、そして25年の議長国

になる南アフリカで構成されることになる。なかでもブラジルは、インドの議長としての振る舞いを、大いに参考にするはずだ。

ブラジルでのG20では①社会的包摂と飢餓と貧困との闘い、②持続可能な開発とエネルギー転換、③グローバル・ガバナンスの多国間機関の改革——の3つが優先的事項として強く打ち出されるという。これらはインドでのG20関連会合でも絶えず協議されたものだ。

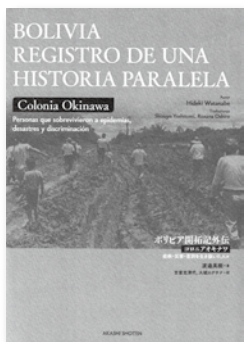
インドでのG20サミットで、アフリカの55か国・地域で構成するアフリカ連合（AU）の加盟が決まった。インドには、AUのメンバー入りを主導することでグローバルサウスの代弁者としての地位を固めたい思惑があった。

一方、中南米諸国は中南米カリブ海諸国共同体（CELAC）を通じてG20への加盟を正式に要請していたが叶わなかったという。24年11月にリオデジャネイロで行われるG20サミットで、ブラジルがもう一つのグローバルサウスの盟主としての立場を確実にするために、CELAC33か国の加盟に奔走するだろう。

「インドは私の頭ではなく、感覚を通して私のなかに入ってきた」と語ったのはオクタビオ・パスだ。彼はメキシコのノーベル文学賞受賞者で、1960年代に駐インド大使を務めた。今、中南米とインドは「感覚」は共有している。あとは、互いの存在や価値観をどう「心」に染み込ませるかではないだろうか。

（いわき さとし

日本経済新聞社 ニューデリー支局長）



## 『ボリビア開拓記外伝

### —コロニアオキナワ 疫病・災害・差別を生き抜いた人々—

渡邊 英樹 琉球新報社

2022年5月 287頁 1,900円+税 ISBN978-4-86764-003-6

“BOLIVIA REGISTRO DE UNA HISTORIA PARALELA: Colonia Okinawa Personas que sobrevivieron a epidemias, desastres y discriminación ボリビア開拓記外伝 スペイン語版”

渡邊 英樹 吉富志津代・大城ロクサナ訳 明石書店

2023年10月 210頁 2,500円+税 ISBN978-4-7503-5669-3

ボリビアへの日本人移民は戦前のペルーから転出した日本人移住の歴史から始まり、戦後ボリビア東部サンタクルス市の近郊に沖縄等から日本人が入植しコロニア・オキナワとサンファンが建設されたことから本格化した。著者は国際協力機構（JICA）の前身の一つ海外移住事業団職員として1969年から1974年の間ボリビアのサンタクルス支部、1977年までJICAに勤務後、紫檀家具を加工する日本ボリビア合弁会社の社長として1978年にサンタクルスに再赴任、1983年までその経営に携わった経験をもつ。本書はその後の2018年の沖縄県民ボリビア移住110周年記念式典に至るまでの著者とボリビアとの関わりの記録である。移住事業団支部在勤時に創設に関わった「コロニアオキナワ農牧総合協同組合（CAICO）」の初期の歴史を書き残そうと考えて纏めた日本語版を読めない世代の日系人に残すためにスペイン語版も出版した。

コロニアオキナワの開拓は苦難続きで、何度も水害と干ばつに苦しめられ、離脱者が相次ぐほど貧困から抜け出せないでいた。その起死回生策として綿花事業に乗り出したが、間もなく天候異変とオイルショック後の価格暴落によって膨大な借金を残すに至った。著者は移住事業団職員でありながら経営顧問という肩書きでCAICOの運営の中核にいたことから、移住地に多額の借金を負わせた張本人と糾弾されたが、その後コロニアで適作農産物が高収益をもたらし、綿花栽培で導入した機械化大規模農産体制によりいち早く対応できたことからあの時の苦難あってこそ今のコロニアがあったと再評価され、これまで創設期の歴史の中で皆が沈黙を守っていた部分を後世に伝えるべく本書を執筆したという。ボリビアでの日本人移住地開拓の苦労、綿花栽培事業の失敗、機械化大規模農業の開花など、ボリビア開拓の実情を知る上での貴重な、しかも二か国語による記録である。

〔桜井 敏浩〕



## 『ホセ・グアダルーペ・ポサダの時代

### —十九世紀メキシコ大衆印刷物と版元バネガス＝アロヨ工房—

長谷川 ニナ 八木 啓代編訳 上智大学出版発行・ぎょうせい発売

2023年9月 317頁 2,000円+税 ISBN978-4-324-11329-5

メキシコの版画家で政治風刺画を得意とし、生涯3万点もの作品を残したホセ・グアダルーペ・ポサダ（1852～1913年）は、後に壁画運動をリードしたリベラやオロスコにも大きな影響を与えた近代メキシコ絵画の祖といわれるが、生前に芸術家として評価されることはなく、貧困のうちに没した。彼の代表的な作品は死者の日のイメージとして知られる華やかに着飾った髑髏の貴婦人像であるが、卑猥、低俗に流されることはなく、庶民の生活、風俗を描き哀感を描いたものだった。その絵の大半は庶民向けの安価な hoja と呼ばれる1枚紙の印刷物で出版され、その版元はアントニオ・バネガス＝アロヨだった。

本書はポサダの作品、バネガス＝アロヨ工房から出版された多くの図版に、それらの時代背景、風刺の意味、大衆文化資料としての意義、さらにポサダと工房の関係などを分析し、当時のメキシコの庶民文化や哀感を読み解こうとした労作。著者はメキシコ市出身、1978年に来日し、現在、上智大学外国語学部教授。

〔桜井 敏浩〕